
できたての国

ラグタイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

できたての国

【Zコード】

N4450P

【作者名】

ラグタイム

【あらすじ】

平凡な高校生の少年が、異世界で国を創ってしまう！？その少年が異世界に着いた時、力が宿った。その力を行使していき、時には人間を生き物を、自然や建物、軍隊、さまざまなものを自分なりに造り上げていく！また人間以外にも多種多様の生物が存在し、魔法という技を使う者がいる世界。少年はどのようにして国を導いていくのか？その行く先は、少年に手にゆだねられた。

魔法が発展した世界、ガントリウム。

ガントリウムには4つの大陸と島々で形成されている。

大陸には人間はもちろんのこと、魔法や弓を扱うのに慣れたエルフ。

魔法をまとい好戦的な魔物や魔族。

独自の進化を遂いできた昆虫族や魚人族などが生活をしている。

ある時、ガントリウムの東の果てに突然、大きな島が現れた。

しかしその大陸からも離れていたため島の存在に気づく者はいなかつた。

たとえ気づいたとしても大陸から遙か離れた、たった1つの島には見向きもしないだろう。

ただでさえ大陸から離れているというのに、利用価値があるかどうかともわからぬような島なのだから。

・・・・・だがその未知の島には、秘めざるもののが存在していた。

世界と島（後書き）

小説を読んでくれてありがとうございます！

短いかもしませんが、すいません。

こんなかんじですが直しくお願いします――――

おかしな看板

季節は12月、夜の21時。

この寒い季節の夜、冷たい風が体を抜けていく夜道を歩いてた。

居酒屋の横を通り忘年会のシーズンなのかガヤガヤと騒ぎ声や笑い声が飛び交っている。

さらには飲みすぎて足元もおぼつかない男がタクシーに乗つて帰つていいく。

そんな姿を見ていると正直言つて、イライラしてくる。

自分は夜遅くまで大学受験の勉強を必死にしているのにもかかわらず、大人達はお酒を飲んでいるからだ。

そう心の中で叫び、家に向かつて歩いていく。

俺の名前は眞藤 蓮。じく普通の高校3年生だ。世間的に言つては受験生といつ部類に入る。

今日も夜まで勉強し、寄り道もせずに帰路に着いたとしていたが、曲がり角で昨日までそこに無かつたもの気づいた。

あなたの願いを叶えます

と書いてある、木でできた看板が置いあったのだ。

矢印は角を曲がれ、という意味なのだろうか？

こんな可笑しな看板があつてもいいのだろうかと思い自分の田を疑つたが、どんどん近づいていくうちに明確になつた。

確かに存在していたのだ。

「あなたの願いを叶えます」と書いた看板が！

おかしな看板（後書き）

誤字・脱字があつたら報告お願いします！

曲がり角の先に・・・

俺は「あなたの願いを叶えます」と書いてある可笑しな看板の前に来てしまった。

どう見てもありきたりな看板なのに、内容が内容なのだ。

いつもならば可笑しな看板があつても田にも止めず通り過ぎてしまつと思つが、今日は何故か気になつてしまつがいい。

受験勉強に嫌気がさしているのかもしれないな・・・毎日、何時間も勉強しているから頭が疲れているからかもしれない。

「」で冷たい風が吹いたので一旦、思考が途切れた。

「寒いー」

思わず体を締めた。

風がやみ、体が震えたがもう一度考え方直す。

でも誰かの悪戯とも捉えられる。高3にもなつて引っかつたら馬鹿だ・・・何も無かつたら、もつとイライラしてくるだらう・・・

そんなことを考えながらも自然に足が進んでしまった。理性よりも

好奇心の方が高かつたのだらう。
いまさら戻るなんて気が引けるしな。

「気晴らしなればいいやーーー。」

もし悪戯でも気晴らしになればいいやーーーとプラス思考に持つて行き
目的地へと向かつて行つた。

* * * * *

遂に来てしまつたようだ・・

俺は思わず息を飲む。

「何じやこつやーー。」

俺は、初めていいの角を曲がつた。

角の先には一見、住宅しかないよつて見えたが異様な雰囲気をかも
し出してくる場所があつた。

それはこの辺りの今風の住宅とはかけ離れた造りで、2階建てのア

パートだった。

外壁には植物のつたが壁を沿うようにして絡んでいて、いかにも古そうな屋根や部屋の扉。極めつけに1階の街灯が今にも消えそうな勢いでピカピカと点滅している。

明らかに不気味だ！！

せうにはさつきと回し看板が、オンボロアパートの階段に立てかけてあった。

あなたの願いを叶えます

矢印が上を向いていようと「上」とは2階にあると思われる・・・

俺は遂に来たといつ喜びで恐怖心を押しのけ階段を駆け上がりつた。

あつ街灯、消えあがつた！！

「ざけんなよーー」

そう言いながらも笑いがこぼれた。

曲がり角の先に・・・（後書き）

誤字・脱字があつたら報告お願いします！

街灯が消え薄暗くなつた階段を上り、2階についた。

2階に上つてみると、階段で足元が見えず3回もつまづいた。

「街灯のヤロウやりあがつて！」

軽く街灯にいらだちを感じながら強打したスネをさする。

スネを犠牲に2階に上ってきたのだから、目的地に行かなければならぬ。

蓮はそう思い、田の前にある異様な雰囲気をかもし出した古びた扉を見上げた。

なんだよこれ？、と力の籠つていらない声を上げてしまった。蓮は扉に圧倒されていたのだ。

それは今までに見たこともないような不思議な模様が金属に彫られていて、さらには扉と建物を繋ぐ金具が錆びてることからも、かなりの年月が過ぎていることもわかる。

蓮は扉を見てから異常に心拍数が上つていた。

それは恐怖から来るものかも興奮から来ているのかもわからなかつた。

両方が混ざつたような複雑な気持ちなのだ。

早く中を見てみたい！何があるのか！？

蓮は自分の気持ちに委ねて、夜風に吹かれて冷たいドアノブに手を掛けた。

手汗でべた付いた手には、冷たいのが丁度いい。

何があるんだ！？

そう思いながら古びた扉を開けていく。幸い鍵がかかっていなかつた。

少し重く感じたが、好奇心の方が打ち勝つていたせいか気にすることはないかった。

長い間、部屋を閉めきっているのかモワワとした湿つて生暖かい空気が少しづつ出てくる。

蓮の心臓は最高潮に動いていた。

「すみません～」

内心ビクビクしていたが、勇気を振りしぼり声を出した。

扉（後書き）

すこませんまだ異世界に行けないです・・・

次で行きます！

どうぞ宜しくお願ひします。

蓮は中に声を掛けたため返答が返ってきた。

「じりりー

中から返ってきたのは、低音で少し響きのある洪い声だった。恐らく男性だらう。

蓮はもひとつ堅苦じい返答が来るかー…?と考えていたが、それは杞憂に終わることとなつた。

「おじやまします。」

玄関と部屋を繋ぐ廊下。廊下に上ると部屋を見渡せないが薄暗いことは分かる。

薄暗い雰囲気が蓮を部屋に導くように包み込む。

蓮が廊下を歩いていて古いフローリングが老朽から来るいびつな音がなつた時、驚いたのは蓮つまでもない。

部屋にどどどん足を進めてこくへ、部屋の全貌が現れていく。

すじー……！

部屋は全体的に薄暗く、じめじめしていた。

その薄暗いのは電球がないからであろう。

わずかな明かりは部屋の両脇に何本かある蠟燭だけである。

火事にならないのだろうか？

また部屋の奥には机が置いてあり、その向かい側には先ほど声を発しただらうと思われる初老の男性が椅子に座っていた。

そのお爺さんはいかにも優しそうな面影だった。

他にもさまざまなもの沢山あった。

この部屋は明らかにとても不気味な雰囲気だ。

現代の日本にはありえない様な感じの一

「そこにお掛けになつてください」

と言ひながらお爺さんは自分の田の前の、机を挟んだ椅子を指差す。

「えつあ、はい」

お爺さんがいきなり喋り始めたので蓮は驚き、口もつてしまつた。

そして指示された椅子に腰を掛ける。

「表の看板を見て来たのかな？」真剣な顔で蓮の目を見て言つ。

その真剣な顔を見て、蓮は好奇心に従つてこの場所にきたため申し訳なかつた。

だが行動に出でずに答えを言つ。

「はいー。」

「そつか。では何があるか？」急にお爺さんの顔つきが鋭くなる。

蓮は願い」とのことを考えていなかつたので、直ぐには答えられなかつた。

不気味な部屋に沈黙が訪れた。

俺をからかつているのか？蓮はお爺さんに疑いを持つが願い事を考える。

受験合格……

言つてもハッキリと意味がないことは分かりきつてゐるし……

彼女が欲しい。

俺は中学生か！と自分で自分に対しツツツツを入れる。

そしてまた考え始める。

何かないかな… そうだ！

自由が欲しい！！

勉強で自由がないしな。

「自由が欲しいです！…！」

「ハツハツハ。自由が欲しいか！大きく出たな。ここで会ったのも何かの縁だ。

だからお前には願い通りに、全ての自由を授けよ。」

するとお爺さんはブツブツと何かを呟えだした。

しかし不思議と蓮にはだんだんと意味が分かつってきたのだ。

「お前には全ての自由を授けよ！次に起きたら願い通りだ。」

蓮は急に睡魔に襲われ、首が力なく垂れた。

その時には理解していなかったのだ。

全ての理由とこの意味を

お詫び文（後書き）

1回、書を終わったのに消してしまって泣きました（笑）
ちよつと強引かも！？しれないですが、そこは大目に見てやってく
ださい。

誤字・脱字あつたら報告をお願いします！

願いは叶つ！

蓮はようやく睡魔から解放され目を開ける。

目を開けると自然に光が入つていく。

光が入ることで寝起きで曇つている視覚もしだいにハツキリとしていた。

そして蓮は眼中に広がる光景に驚かされることとなつた。

何だここは？と思ひながら辺り確認する。

生憎そこは薄暗くも、じめじめともしていなかつた。

岩肌が目立ち、縁や水などはどこにも見当たらぬ荒地。

縁や水が無ければ、もちろん生き物なんてものも存在できない。

さうに辺りには無数の大小さまざまな岩や石などが、いたるところに落ちていた。

土地も見るからにカラカラに干からびており、土を手に取ると痩せていることも分かった。

何もなくずっと続していく荒地。

蓮は一瞬、自分の目を疑つたが、それは変わることのない現実だった。

「嘘だろ?……」

希望を失つたような声で呟いた。

自分は自由を求めたが、こういった自由ではない。

蓮はただ自由奔放に過ぎていていたかつただけなのだ。

たとえここで自由に過ぎせと言れども、それは一時的なもので、何もなくては待っているのは死だけなのだから。

蓮は死という言葉に震えた。

ここにいたら絶対に餓死してしまう……今でも喉がカラカラなのに。

そう思つたことで冷や汗が流れ、体が暑くなつていいく。少し興奮状態で体温が上昇しているのだろう。

汗で湿つた「」を脱いだ。

* * * * *

蓮は荒地を歩いているビュウビュウと突然、突風が吹いた。

突風は地面の砂を巻き上げ、さらに強くなつていいく。

「ヤバくねえか！？」

突風は蓮が歩いている方向に向かつてきたのである。

しかし気付いた時にはもう遅く寸前まで来ていた。

舞い上がつた砂が体に打ちつけ、その風に反発して進もうとするも、すぐに力で押し返されてしまつ。

それにも関わらず、蓮は風の流れる方向とは逆に向いていたため砂を吸い込んでしまつた。

「ゴホッゴホ」

砂は気管支に入りこみ咳を誘発させる。

しばらくの間、その場に留まり突風をしのいだ。

蓮の喉は既にカラカラの状態であつたが、さらに砂が口に纏わり付いたため、水を求めた。

しかしこんな荒地に水があるわけがない。

だが蓮は強く願い続けた。

水……水！！

すると不思議と田の前に水が溢れ出た。

その時、やつと蓮は理解したのだ！

お爺さんの言つてこた、「全ての自由」とこつ言葉の意味を。

願いせりべー（後書き）

最後の方、少し早く書いたので焦りぎみになってしましました。

感想・レビュー、どうぞお待ちしております！

異世界に飛ばされたから3日という時間が過ぎた。

夕日が空を真っ赤に染め、地面を照らしていた。

蓮は思わず、綺麗だ、と呟いていた。その宝石ようにキラキラと輝く夕日に見入ってしまったのだ。

この世界も昼には太陽が地上を照らし、夜には月が浮かびあがる。

そこは地球と変わらない。

だが夜空は地球と違つた。

この場所は日本の田舎のようこそ、たえざるものがないのだ。

日本の都会は、車や工場などから出た排気ガスが空を埋め尽くし、星の光をさえざる。

また夜でも電気を使い明るくし、僅かに届いた光すらも見え辛くしていた。

だがここには排気ガス、もちろん電気などとった、たえざるもの

はない。

だからこの場所の夜空は、無数の星が自分の存在を主張するかのように輝いている。

上を見上げると一面の星空。どちらを見上げても星。

都会に住んでいた蓮にとって、滅多にできない体験をしたことで興奮していた。

その壮大なスケールの星空を見た初日の夜は、興奮が収まらずなかなか寝付けなかつた。

寝付けなかつたことは蓮の秘密である……

蓮は3日間のうちに気付いたが昼も夜もたいして気温が変化しないのだ。

変化しないというか、寒くもなく暑くもなく人間には調度いい温度。

しかし衣服を一着しか持つてきていない蓮には有難かつた。

体を動かしてもダラダラと流れるように汗は出ないし、寝るときたなつて寒いということはなかつた。

蓮も不自然に思つたため考え始める。

この辺りは季節がないのか？

そういう地方もあるしな。

いやでも……

地球でいつ春や秋の一番、過ごしやすい時期なのかも知れない……

そつだとしたら冬と夏のどちらが先に来るんだ？？

「ああも～わからんねえー。時間が経てばわかるだろー…さあ飯だ飯！
！」

蓮は自分なりに解釈をし、食事の準備をする。

食事の準備と言つても単に能力を使つだけであるが。

蓮はその場の砂と石を払いのて座つこみ、目を瞑る。

体を落ち着かせ精神を集中していき、脳みその神経に力を込めていく。

砂を巻き上げた風が蓮のいる方向に吹く。しかし蓮は風にも動じない。

そして欲しい物を頭の中で強くイメージしながら、願う。

すると蓮の手には、頭の中でイメージした焼き鳥が2・3本、乗っていた。

「 いただきます」

このイメージした物を作り出す能力は、水が欲しかった時に理解したのだ。

喉が限界まで乾いた時、水を強く思つたことで目の前にでてきた。

それがきっかけだった。

能力（後書き）

誤字脱字があつたら報告、お願いします！

感想・レビュー待つてます（笑）

能力の限界

蓮の能力とは頭の中で強くイメージした物を出現させること。このうも。

例えばあれが食べたいと思えば、イメージするだけでの食べ物ができる。

そのイメージした食べ物には、ちゃんと味や触感も付いてくる。

蓮がいろいろな食べ物を出現させ、発見したことなのだ。

恐らくその食べ物にも味や触感だけではなく栄養も含まれているのだ。

牛肉や豚肉を摂取すれば、食べた分だけのたんぱく質を得る事ができる。

また野菜を摂取すれば、それに応じた分のビタミンやミネラルを得る事ができる。

そういうた蓮がイメージして創り出した物でも、ほとんど本物と変わらないのだ。

変わることでも蓮が創り出したという物の概念だけであら。

現に蓮はイメージした食べ物は本物と変わりないことを証明してい

た。

異世界に来てから4日過ぎた今でも蓮は何一つ異常なくピンピンしている。

何もない荒地にいるといつ生活環境を除けば、自身に問題はない。

もし食べ物に栄養が入っていなければ今頃、空腹で歩くこともままならないだろう。

そして訳の分からぬ土地で誰に見取られることなく死んでいく。

蓮はそんな想像するだけでも恐ろしい事を自身の姿と照らし合わせてしまつた。

顔の血の気が引いてく気がした。

だが死ぬのは嫌だ！まだ人生を楽しんでいいし。

そんなことを思いながら蓮は、自分の能力を最大限に使用してやうと心の中で決心した。

蓮はまだ能力の限界を知らなかつた。

今だに食べ物しか創り出していないのだ。
しかしながら食べ物しか創つていないことにも理由がある。

この能力が怖いのだ。

頭の中でイメージした物を出現させるという人間離れした能力に……

食べ物を創ることは、生命活動の維持にも繋がるため自然と恐れは生まれなかつた。

逆に食べ物を創り出さないと死んでしまうのだから。

死んでしまう事が何倍も怖い。

だが蓮にも食べ物を創り出すだけで、この何もない荒地で死ぬ氣もさうならない。

だから今日、やつと能力の限界に試そつと決心したのだった。

まず手始めに、今まで創つたことのある食べ物から始める」と
決めた。
失敗する事はないだろう。

頭の中でその食べ物のイメージを固めていく。

丸くて…光を反射するよつにツヤのある赤い皮。

その皮の中には、甘酸っぱくて白い蜜。

中央に甘い蜜がたつぱり詰まつた…林檎…！

するとビボワツという音と供に林檎が現れる。

「よつしゃ成功！！」

蓮はイメージ通りに出来上がつた林檎を手に取りかぶり付く。

林檎をかぶり付くと口のなかに特有の甘酸っぱさが広がり、うめえうめえ、と蓮は言いながら平らげた。

林檎を食べ、気分がリフレッシュした蓮は再び作業に取り掛かる。

次は大きく飛ばして家を創つてみよつと決めた。

この世界に来てから困つたことと言えば砂を舞い上げた風が吹いて、目に入ることなのだ。

そのため今も蓮の目は炎症を起こし、痛々しく充血している。

要するに風を避難できる場所が欲しいのだ。

出来るか分からぬがイメージを膨らましていく。

3階建てのログハウス……

中は断熱性があり風通しがいい様な暮らしがやすい家。

屋上があつて昼寝がしやすいよ!」……

突然、不自然に風が吹き始める。思わず反射的に顔を逸らしてしまった。

すると、さつきの林檎が出現するのとは比べ物にはならない、

ドスンッ

とこう音が聞こえ、地響きが伝わってくる。

その後には砂埃が辺り一帯を覆つかの様に舞う。

初めて砂を含んだ風を正面から受けた時と同じようにむせた。

「ゴホッゴホッ」

砂埃が治ると蓮の顔は驚愕した。

そこには蓮のイメージした物を更に上回る立派なログハウスが建つていた。

恐らくこの土地に来る前に見た雑誌のログハウスをイメージしてしまっていたのだ。

「ハツハハハ、できちゃったよーー！」

蓮は創り上げたログハウスを見上げながら、次は何を創りうかと妄想に漫るのであった。

能力の限界（後書き）

蓮君、最強ですね。

次回は蓮君の相棒を創つてしまいまーす（笑）

吸い込まれそうなほど透き通つた青い空には雲ひとつなく、太陽がギラギラと燃えている。

「今日もいい天気だなあ」

ログハウスから出てきた蓮は片手で口差しを遮り、空を見上げる。蓮は、ううへん、と言いながら体を伸ばし、足を地上に着けまいと限界まで伸びた。

なぜか伸びると身長が伸びたような感覚になるので気持ちがいい。

そして体をほぐし終わった蓮は、朝食の準備に取り掛かる。もう朝食を作ることも慣れたものだ。

パンとハムとスープと色々の野菜を少し、それとレモンティーを一杯。

蓮は頭の中で思い浮かべていく。

今日は「ーンスープにしようかな……でもパンプキンスープも捨てがたいしな……

でも気分を変えてオーオンスープにしよう。

そつして出来上がった料理を持ち、家の近くの湖まで運んでいく。

湖と聞いて疑問を持つかもしれないが……元からこの場所にあった訳ではない。

元はただの荒地だったのだが蓮が妄想を実現させたことで湖ができた。

湖と言つてもそんなに馬鹿デカくもないが、池という表現も合わない。

その微妙なラインが蓮のお氣に入りになつた理由もある。

風が吹くと水面が揺れ、朝日を反射することで輝く。その綺麗さが蓮を虜にした。

都會育ちの蓮には刺激が強すぎたのかもしれない。

またその湖を囲むように木々が一本一本、そびえ立つてゐる。

10キロメートルに渡り木々を創り出したのだが、全てを埋め尽くそうとするのは、気が遠くなる。

そして湖の畔に着いた連はこの前創ったシンプルな木の机に朝食を置き、机とセットで創った椅子に腰を掛ける。

「 いただきます 」

蓮はまず紅茶を飲みながら湖と木々から出るマイナスイオンに癒されていった。

「さつ冷めなこいつに食べよつー」

パンを半分程食べた頃にバサバサツといつ音が耳に響く。すぐに機械音ではないことが分かった。音が規則正しく聞こえてこないことからも分かる。

「あつやべつ忘れてた」

そのバサバサツと不規則な音はどんどんと大きくなつて近づいてきた。

多分お腹減つてるよなー！完全に忘れてたし…

すると突如、湖に一筋の影が映り過ぎ去つていぐ。

蓮は慌てて上空を見上げるが、そこに影の正体はない。しかし蓮にはその影を作つている正体を知つている。

なぜならば、蓮が初めて創り出した生き物だからだ。

再び影が戻つてくるも、さつきのよつに通り過ぎたりはしない。

一箇所に止まつたと思つと影の正体の凄まじい咆哮が聞こえ、青い塊は湖に飛び込んだ。

水が津波のよひに辺に押し寄せたのはいつまでもない。

その時、蓮はいつ思った。
絶対に怒っているな、と…。

蓮の朝（後書き）

更新遅くなつてスミマセン…

青い塊

しばらくすると水面からヒョウコツと顔が浮かび上がり、蓮を見つめた。

全体的に顔の色は青く、今日の空と同じような色だ。頭部には小さな角が生えて、大きな口も持っている。

そんな口に丸呑みされたら人間のような弱い生き物はひとたまりもないだろ？

しかしこの地に存在して条件に該当する生き物は、蓮ぐらいしか居ないのだが……

顔つきから見て分かるように、さっき上空から湖にダイブした青い塊はドラゴンだ。

もちろん蓮が創り出したドラゴンだけれども。

するとドラゴンは

「ガウツ！」

と蓮に、飯をくれ、と言つてこなかのよつて鳴いた。

「ああゴメン忘れてた……
ちょっと待ってくれな……」

蓮はそう言つて、自分とあまり変わらないぐらい大きな魚を田の前に出現させた。

ちなみに蓮の身長は180センチ程ある。

「おーークウーーちょっと持てないからコッチに来てくれないか？」

このデリコンの名前はクウとこい。

水の中を泳ぎ岸辺に向かってくるその大きな姿にこの名前は合はないかもしないが、創った時には丸くなつて寝た状態で現れた。

クウクウと小さな寝息をたてて寝ていたのだが、その姿がとても可愛らしかったのでこのクウといつ名前を付けた。

岸辺に辿り着くとクウは巨大魚に向かって飛びついた。

「ゆーくつ食べよう〜！！

さつ俺も食べよかな」

クウの食いつぱりは見てて気分が良くなるよつた気がする。

蓮はちよつと冷めたスープをすすりながら、クウの食事風景を眺める。

巨大魚をバクツと一気に食べるの、とてもダイナミックだ。

しかも器用に骨は吐き出している。

「ガウツ」

かなりの大きさの魚を食べたクウだが、お代わりを要求してくるようだつた。

「アーッ解ーよッしゃ クウ行つて来い！！」

蓮はそつまつと湖に向かつて手を向けると……

手からさわざまな種類の魚が飛び出し、面をたてて湖に落ちる。

魚は生れてるのでクウも楽しめるだらう。

クウは魚こつられ再び湖に飛び込んだ。

マグロやローヤマスやイワナやウナギなど

「あれつー、マグロつて海水だよな…………？」

そんな感じで騒がしい朝は過ぎ去つた。

「ガウガウッ」

青い塊（後書き）

誤字脱字があつたら報告お願いします！

クウの朝食のことで騒がしい朝だつたが、蓮も無事に朝食を食べ終え一息ついた。

目の前にはクウの食べ散らかした魚の骨が無残にも広がっているのだが、散らかした張本人は岸辺でくつろいでいる。

「しかしよく食べたもんだな～」

蓮は思わずその食いつぶりに关心してしまった。

さつき創り出した魚たちも、ほととど食いつぶれてさしてしまつただろう。

「マグロもこの中に……」

蓮は辺り一面に広がつた骨の山を見て背筋が凍る。

次は自分の番かもしれない……

そんな考えが脳内をよぎつた。

自分がこの骨のようになると想像してしまつたのだろう。

クウ自身、自分を創つてくれた主人を喰らひつゝもつは、サラサラないのだけれども…

そこは蓮の杞憂だった。

しばらくして蓮はクウに火を吐いて骨を灰にしてもらつよう頼んだのだが、ブレスが強すぎて灰すら残らなかつた。

ブレスの火力に驚くが、着くからといい驚いてばかりなので、少しばかりか耐性が付いてきた。

ビューやらクウは水に浸かっていることが多いものの、ファンタジー特有のドラゴンブレスは吐けるようだ。

もちろん大きな翼が2枚あり空を飛ぶことだってできる。

その空を飛べることを今日、蓮は利用しようとしているのだが……

「クウー！ ここおいで」

一先ず蓮は岸辺でくつろいでいるクウを呼び寄せる。

蓮はブレスの火力に驚くが、この土地に来てからといい驚くことが多いので、少しばかりか耐性が付いてきた。

クウは50メートル近い巨体を動かし蓮に向かって近づく。

「クウ、今日は俺たちがどんな土地にいるか見て回りたいんだ！ そこでクウの出番だ！ まあ要するにその背中に乗せてくれないか？」

？」

蓮には思惑があった。未だ自分がいる場所がどんなところかが分からぬのである。

大陸かもしれない。ましてや広い海に浮かぶひとつの島かもしれない。

この世界に飛ばしてくれたお爺さんは、何も教えてくれなかつた。

今思えばあのお爺さんは誰だつたのだろうか…？

大陸ならば他の生命がいるかもしないだろ？

かつての地球上にいた生命体のよつな、人類以外の生物が住み着いているかもしれない。

つまり蓮は情報がほしいのだ。

自分のいる場所がいつでも安心して生活していくといふなののかといつ情報が。

「グルウウ～」

蓮は近づいて来たクウの頭を撫でてやる。

数分間、頭を撫で続けると機嫌が良くなつたのか、自分の羽を地面に付け蓮の方を向く。

翼を伝つて背中に乗れ、と表しているのだろう。

「ありがとなー。じゃあまずは南に行ってくれるか？」

ガウと一回鳴き、蓮を乗せ南の方角に飛び立った。

クウが飛行速度を上げると、景色が後ろへ流されていく。

「おお～気持ちい～！」

ドラゴンに乗つているとスキーの直滑降をしているかのように頬に地上より冷たい風が吹き付ける。

まさに安全バーのないジェットコースターだ。

でもそのスリルが病み付きになりそつとたまらないのだが……

しばらくすると、木と荒地の狭間が見えてきた。つまり湖から10キロメートル近く飛んで来たことになる。

「クウまだまだ飛べるよな～？」

風の過ぎ去る音に負けじと声を張り上げてクウに問いつ。

これでバテていたら相当、燃費がわるい……

クウは
「グワアア～」と吠えると同時に、最大限にスピードを上げていった。

海にたどり着いた

「ガウガウガウッ」

蓮の耳には空を飛んだ時から、風のブオーといつ鼓膜が破れそうな風圧を帯びた音が響いていたが、低い吠え声も伝わった。

空を飛んでいる間に寝付いてしまった蓮に、クウが体を左右に動かし呼びかけていたのだ。

そのゴツゴツとした鱗が体に接触することで蓮も違和感を感じたのか目をしょぼしょぼと開ける。

「…………あれっ！？俺、寝ちゃってたのか…………？」

目を覚ました蓮は、自問自答をするかのように記憶を辿りながら自分が今おかれている状況を確認する。

何も支えないのない空中で寝てしまつて助かったのは、クウの心遣いがあったからだらう。

少し大袈裟かもしれないが、まるでシートベルトの無レジュットコースターに乗つて意識を失うのと同じくらい危険だ。

蓮はそのスリルに興奮してはしゃぎすぎ疲れ果て寝てしまったのだが……

落ちなかつたことに安堵してほつと胸を撫で下ろしたのだった。

試しにクウから身を乗り出し、恐る恐る真下を見た。

「うわあ～！～」

蓮の日が見たものとは、脳裏に映るこの世界で生活していた森や湖ではなく、殺伐とした荒地でもない。

地球でも家族とは旅行で行ったり、友人と夏休みに暑い中、電車に乗つて行つて楽しんだ場所。

ふと昔の楽しかつたことを思い出す。

（みんなどうしているかな…母さん、捜索願い出していなきゃいいけど……多分もつ警察に出してるよな……）

と地球にいた頃の仲間や家族を思い浮かべつつ、真下に広がるHメラルドのような鮮やかな色で、波立つ海を見下ろす。

珊瑚礁があるのか海の色が所々、変化している。また沖の方に近づくにつれ、色が濃い青色になつていて。

蓮が家族旅行で行つた沖縄の海に倣する、もしくはそれ以上に壮大な海かもしれない。

そう蓮は最南端の海まで寝ていてる間にあっけなく来てしまつたのだ。

そんな広大な海が蓮の寂寥とした気持ちを受け止めた。

「よしつクウそここの浜に着陸してくれないか？決して海にダイブとかはしないでおくれよ……」

今日の気温はちよつびっこ適温だが、最近は少しづつだけれども徐

々に气温が上昇している氣がしている。

しかしそまだ海に入るには早すぎるだらう。

蓮がこの土地も四季があると思に始めた時だった。

クウは蓮の言葉を理解したのか、一度「フウ」と犬のよひに鳴や、地面に着陸する体勢に調整していく。

頭を前に傾け重心を前方によらせる。そして沖の方に向かっていたが、翼で空気抵抗を利用し、体の向きを浜辺に変えるようターンした。

そのままのスピードで降下し始め、高度を落としていく。

「クウ……頼むからドボンッは嫌だからな……」

蓮は落下しないようにクウの大きな鱗で「ゴシゴシとした体に必死に抱きつきながら、念を押した。

もし落ちたのならば高確率で海面に体を打ち付けられ、怪我ではすまされないかも知れないのだ。

するとクウは耳をピンチと後ろに流し、翼もたたみこんだ。そして海面と垂直にならうともスピードを減速をせようともしない。逆にスピードが加速していく一方だ。

蓮は状況を確かめようとするが、風圧が強すぎて田を開けることさえもままならない。

ゴーグルでもあれば大丈夫なのだが……

しかし蓮がゴーグルを創り出そうという考えに至らないのは、クウに抱きつくのだけで精一杯なのだから。

さらにスピードが上昇していくもクウは楽しんでいるように見えた。「グワアーン」と咆哮しながら落下していく様子は、まさに大きな弾丸のようだつた。

海面まで5m…4m…3m…2m…1m

カウンtdownも1秒も満たないうちに終わった。

海面まで5mになったところで急にクウは両方の翼を全開まで開き、今まで溜めてきたパワーを力一杯、前方に押し出した。

するとザツバアーンという音と一緒に水しぶきが飛び散った。決して海中に落ちたわけではない！

クウは海面を擦ったが、方向転換に成功したのだ。

そのままクウは浜辺の方まで低空飛行で飛んでいった。

その時の蓮の顔は半分泣いていたそな……

クウの拾い物

クウの硬い鱗に覆われた体を踏み台にして浜辺に降り立つた。その時に蓮は体重を全てかけたのにもかかわらず、ビクともしないクウの強靭な体に感心した。

しかし自身の体も3メートル近い高さから飛び降りたが、足の裏や骨に伝わってくる痛みが弱かつたのだ。ふと疑問に感じる。

確かに膝に伝わる衝撃も弱かつた。だが一昔前まで受験生であった蓮には運動とは無関係だったのだ。

高校ではサッカー部に所属し走り回っていたが、ここ何ヶ月かは勉強漬けでランニングさえしていなかった。

筋力や体力が落ちていてもおかしくないのだが、結果は真逆。つまりこの世界に来てから身体能力が上がっているという考えにたどりついた。

「泳ぎたいけどな……やっぱ無理か…」

浜辺に降り立つた蓮はすぐさま靴を脱ぎ捨て海水にちょっと指先で触れるが、僅かに冷たい。

まだ蓮の憶測の段階で四季があると感じていたので夏には絶対、海水浴に来てやろうと密かに計画を立て始めていた。

ここにビーチがプライベートビーチになるかと思い、周りを見渡す。もしも知能が低い生物が住み着いていて、楽しい海水浴中に襲われたら不甲斐ない。不意に攻撃された場合、身を守れるかどうか分

からないからだ。

クウ？？

クウのことは心配ないだろう。あの骨をも灰にするドラゴンプレスさえあれば、大抵の敵には負けないだろう。ましてやあの鋭い爪や太く何本もある鋭い歯があるのでから接近戦も問題はない。

さらには左の方は様々な形状の岩が組み重なつて、岩場となつてゐる。右の方は山がちな土地のよつに坂になつて、浜辺と繋がつてゐる。

そんな海にも所々、浜に打ち上げられた漂流物が散らかつてゐるのは地球と変わらないようだ。

食べ物が生き物が腐つたと思われる異臭がするもの、大小さまざまな流木やビン……

でもガラス瓶があるということは、それを作ることのできる種族がいるという思考にもなりかねない。

しかしアルミ缶やスチール缶、ペットボトルが1つも見当たらないことで改めて異世界にきたことを痛感させられる。

まだ見知らぬ土地にいるであろう種族は、ガラス瓶を作ることのできる技術力があつても缶やペットボトルを作るだけの知識と技術を兼ね備えていないのだろう。

でも他の種族がいると分かつたことで、もしかすると襲われるかもしれないという恐怖と、最近はクウを創り出したことで減つたが、1人でいる寂しさが消えるかもしぬないという嬉しさが混ざりあつた複雑な気持ちになつた。

蓮は少し歩き1つの大きめのガラス瓶を拾い上げた。その瓶の中に

は微量の液体が残っているだけで、元は何が入っていたかは不明だ。

でも残りの液体を試飲して中身を確かめようとも思わない。

「あれつこれ何て読むんだ…？」と蓮は皿を細めながら瓶の中心に刻まれた文字を読もうと試みる。

明らかに日本語ではない文字……

漢字のよつこにハツキリとしていないし、全体的にクネクネとしたような文字。

記憶を辿るがそのような文字はみたことがない。もしその言語を喋る生き物に遭遇した時コミュニケーションがとれないと不安になる。できるだけ争いは避け、話し合いで解決したい。

能力を使えばどうにかなるかもしけないが、未だに攻撃となるものを創り出したことがない。だから蓮自体は未知数なのだ。もし今ここで襲われたら戦力はクウぐらいしかいない。

その場ですぐクウのような強靭なドラゴンを創り出したいのだが、必ず成功するとも限らない。

言わば新たな生き物を創り出すのは奥の手だ。

そして今その戦力の大部分を担うクウが行方知らずで見当たらぬのだが……

「お~いクウどこに行つたんだ~？」

蓮は辺りを見渡しながら呼びかける。しばらく返答はなかつたが、岩場の方からクウの咆哮が聞こえた。

何か異常事態があつたのだろうか？クウが戦っている姿が脳裏に映

る。早く助けなくては…

「クウ～今そつちに行くからな～～～」

蓮は一言そつちと、クウの援護をすべく駆け足で岩場の方に向かつた。自分は戦力になるかも分からなければ、早く行かなければまだクウが襲われているとも分からぬが、蓮の頭の中ではすでに何者かに襲われているという想像が出来上がっていた。

暫し走ると岩場に着いた。砂浜の上を数分走ったのだが、息が切れていらない。やはり身体能力が上がっているのだろう。

「クウどっちだ？」と蓮は出来る限り大きな声で叫んだ。声からも焦つてていることが分かる。

すぐさまクウの返答が来たとともに、頭が高く積み重なった岩場の死角から、ひょい、と飛び出た。

蓮の目を見つめ「ガウッ」と一度吠えた。口には小ぶりの蟹をくわえ愛らしく思えた。恐らく岩場で採つたのだろう。そんなクウに一安心した。

だがその安心感もすぐに消えることとなつた。

蓮はクウの傍に行くと、自分の成果ともいえる魚が山ほど積み上がつていた。よくこんな短時間で捕まえたものだと感心するも、思わず目の前の魚に混じつた存在に驚く。

明らかに普通の魚と違つたものが混ざつていて。魚に分類していいのか…人間に分類していいのか…

その存在は青色に輝く尾鰭を持ち、下半身は鱗で覆われていた。上

半身は人間の女性のようにウエストが細く、胸が膨らんで締まった体だ。幸い大事なところは巧く、ワカメのような海藻で巻きつき、蓮の目には見えていない。

海水で濡れたウェーブのかかつた金髪の髪が蓮の気分をそそり立たせる。中性的な顔立ちでパーティの一つ一つが個々を惹きたてて可愛らしい。そんな美しい顔にもまだ幼さが残つており、後数年もすれば可憐な女性になるだろう。

そうクウが捕まってきたのは正真正銘の人魚だった。まだ成人を迎えていないと思われる女の子の人魚……

「えつクウこの子、獲物じゃないよね……？」
「クウ、看病するからその子をこっちに運んできてくれないか？」

生きていることを願いながらも看病しようとする蓮であった。

クウの拾い物（後書き）

内容が浅いという感想を頂いたので、長くしてみました。
ご要望通りには分かりませんが、温かい目で見てやってください。

誤字脱字あつたら報告お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4450p/>

できたての国

2011年3月2日06時03分発行